

『ナンパ先輩』

作：渋谷悠　原案：西島玄

（男、後輩を連れて立ち飲み屋にいる）

いや分かる。分かるよ。俺も昔お前とおんなしだったから。
女見るとあれだろ、チンコ硬くなる前に体が硬くなっちゃう。喉は一気にカラッカラで何言っているかわかんねえ。そういうこったろ？

いやすげ一分かる。大体女ってありゃなんだ。なんであんな柔らかくていい匂いがすんだ。最高かよ。そりゃこっちは固まるってんだ、なあ？

でもなあタケシ、俺は生まれ変わったんだ。ある人に出会ってよお。
毎日女に声かけるって決めて、ノルマ決めて、生まれ変わったんだ。
一日一人、必ず女の電話番号をゲットするって自分に誓った。台風んなろうが、
親戚が死のうが、ノルマは絶対守る。ゲットするまでひたすら声をかけんだよ。
ひたすら繰り返す。

この繰り返すってのが秘訣だよお、断られても何とも思わなくなるし、何しろハートがよ、タフくなる。タフなったら話は早い、そっからは上達あるのみ。
うちの工場の作業だってよ、凍った魚とか野菜とか、ベルトコンベアからバンバン流れてきてさ、お前最初は全然追いつかなかったよな？でも今はどうだ、コンベアの先まで見る余裕あんだろ、手が勝手に動くだろ？俺なんてコンベアが止まって見える日があるぜ。

おんなし。なんでもいいから臭いセリフを言うんだ。君の瞳に乾杯。君は俺に愛されるために生まれた！俺の生きる意味になってみない？なんでもいいからひたすら言う。ほんとな、言うか言わないか、言うか言わないかなんだよ！

（後輩の顔を見て）

え、おま、信じてねえだろ。あこれ信じてねえパターンだわ。

（メモ帳を取り出し、見せる。名前と電話番号で埋まっている）

一回データ飛んでから手書きに変えてよ。大事なもんはアナログがいいぞ。
…そうだよ、全部女だよ、ったりめえだろ。アパートにもう一冊ビッシリ埋まったのあっからな。んでもって、え～、7割ヤツてます。
昨日はこの子。夏美ちゃん。良かったよお、イッた後の顔がさ、もうなんつーか菩薩なんだわ、菩薩。手合わせたくなっちゃった。

いやあ俺なんかまだまだよ。すげー先輩がいてさ、あの人に比べたらペーペー。

ガラケーのメモリパンパンになるくらい女の名前しか入ってねえの。
でよ、先輩脚の、太もものここらへんが性病で紫色になってんのにあの人海でナンパしてヤッてんだ。すげーよ。俺あすこまで出来ねえよ。
性病んなったら俺なんか病院行っちゃうけど、あの人海でヤッてんだよ。負けたくねんだよ。脚の付け根が紫色んなって俺やべえって思ったけど、先輩海行こうつって着いて早々ヤッてんだよ、どっかの岩陰でパコパコよお。すげえよ、俺には出来ねえよ。俺あの人に負けたくねんだよ。

だってよ、先輩は脚が腐ってもやりたかったわけだろ。相手もことも自分のこともどうでもよくて、純粹にやりたかったわけだろ。先輩の頭のとっぺんからつま先まで性欲ってことだろ。やべえよお、やべえ。欲望の向こう側に行っちゃってんだよ。

俺思うんだ。毎日あのデカイ冷蔵庫みてえのに入って、流れてくる凍った魚仕分けてさ。立川って貼ってあったら立川のカゴに入れて、板橋って貼ってあったら板橋のカゴに入れて、カゴが一杯になったら別のカゴ持ってきて。こいつらはまだマシだ。死んでからも凍らせてもらえて、役に立つんだよ、行き先があんだよ。それに引き換え俺たちはどうだ？死んだら灰になって終わり。冷凍食品の、正反對の運命だ。

…しょうがねえなあ。タケシ、お前今度の日曜暇？
いや知り合いから二万で車買ったからさ、いやそーなんだよ二万！お買い得だろ！？売る方も買う方もアホだろ？
いや暇だったらちっと手伝って欲しいんだわ。全部水色に塗ろうと思ってよ。水色、いいだろ、目立つから。その車で街ん中流して、お手本見してやるよ。
海の色、空の色。
俺、水色大好きなんだよ。